

東大世界史 2014年 解答速報

解答速報の作成方針

- 東京大学の方針に合わせて、①高校世界史の知識の範囲内であること、②問題文の指定にしたがっており論理が通っていること、③表現が日本語として適切であること、の3点に留意して作成しました。
- この解答速報の作成にあたっては、他の塾、予備校、教師の解答・解説を一切参照していません。東大世界史講師が独自に作成したものです。
- この解答速報は、公開された入試問題を見た当日中を期限として作成したものであり（分析はその翌日）、内容には注意を払っておりますが、唯一絶対の完全な答案というわけではありません。ご了承ください。

第1問

19世紀中頃までのロシアは西欧列強と協調してウィーン体制の維持をはかったが、ナショナリズムの高揚や南下政策にもなう列強との対立のために体制は動揺していった。立憲王国として支配下に置いていたポーランドではフランス七月革命などの影響を受けて反乱が頻発した。カフカスではカージャール朝に勝利しトルコマンチャールイ条約で領土の割譲や治外法権を認めさせたがイギリスも対抗してイランに進出し、バルカンなどではオスマン帝国領をめぐるギリシア独立戦争やエジプト・トルコ戦争に介入して南下をはかったがイギリスの外交によって阻止された。19世紀後半には英仏とのクリミア戦争を契機に列強との協調体制の崩壊が決定的になり、ユーラシア各地への進出をめぐるイギリスなどと抗争を繰り広げた。バルカンでは露土戦争で勢力拡大を狙ったがイギリスなどが反発しビスマルクの仲介によるベルリン会議で抑制された。西トルキスタンでは3ハン国を支配下に置いたが、イギリスは対抗してアフガニスタン

5

10

15

20

時系列で19世紀前半と後半に大きく分けるとよい。

19世紀前半の総論部。

ポーランドの支配と反発。

カフカス・イランへの進出。

バルカンへの進出。

19世紀後半の総論部。

バルカンへの進出。

西トルキスタンへの進出。

東トルキスタンへの進出。

極東への進出。

単なる進出と抗争の経緯だけでなく、国際情勢への影響を示すことがポイント。

第2問

<p>(1) 7世紀末にブルガール人にバルカン東南部に侵入されてブルガリアの建国を許し、11世紀にはセルジューク朝にマンジケルトの戦いで敗れて小アジアに侵入された。14世紀からオスマン帝国の進出を受け、メフメト2世にコンスタンティノープルを征服され滅びた。</p>	<p>ブルガールは挙げるべきか悩むが、セルジューク朝とオスマン帝国は確実に論じる。</p>
<p>(2) (a) マラッカ</p>	<p>①人口の急増、②東南アジア貿易の活発化の2点は必ず指摘しておきたい。</p>
<p>(b) 清の統治の安定や農業の発展により人口が急増して土地が不足し、また福建や広東を中心に東南アジアとの貿易が活発化していた。</p>	<p>大統領と直接的軍事介入の方針を示したうえで、北部への北爆、南部への軍隊の投入の双方を挙げられるとよい。</p>
<p>(3) (a) ジョンソンはベトナムへの直接的軍事介入を決定し、北部に対し大規模な爆撃を開始し、また南部にも大量の地上部隊を投入した。</p>	<p>大統領と経済政策を挙げたうえで、ドル・ショックと国際経済体制の崩壊まで論じる。</p>
<p>(b) ニクソンが金とドルの交換停止を決定して、ドルの価値の下落や変動相場制への移行が起こり、ブレトン・ウッズ体制が崩壊した。</p>	

第3問

<p>(1) ヒッタイト</p>	<p>(3)は「原料生産」とあるので、絹織物業は不可だろう</p>
<p>(2) ペリオイコイ</p>	<p>誰に対し何を求めたかという2点を必ず示しておく。</p>
<p>(3) 養蚕業</p>	<p>農業経営の特徴と交易との関係を必ず示しておく。</p>
<p>(4) 占城稻</p>	<p>(9)はワグナー法も認められるかもしれないが、この2つを解答しておくのが無難。</p>
<p>(5) 大商人らの商人ギルドに対し市政への参加を求める闘争だった。</p>	
<p>(6) 農奴を用いた大農場経営で西欧に輸出する穀物の生産を行った。</p>	
<p>(7) 組織名：第1インターナショナル 場所：ロンドン</p>	
<p>(8) 運動名：塩の行進 指導者名：ガンディー</p>	
<p>(9) 全国産業復興法、農業調整法 ※順不同可</p>	
<p>(10) ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体</p>	